懇話会 125
時：2025-03-22（土）18.00-20.00
所：ワテラス・パーティルーム
事：田沼意次、田沼意知（おきとも）
人：峰崎博次　＊番組を毎回、鑑賞しながら、今回、いろいろな観点から、解説を行います。
　＊蔦屋重三郎／べらんめい　ここにも登場した田沼意知を取り上げ、詳細な分析を行う
　＊佐野政言（1757-1784）　＊まさつね　取り調べ書があるが、理解し難い
　＊皆さんも、それぞれ、色々と事件を含めて、調べて下さい。

田沼意次　　1719-1788
田沼意知　　1749-1784
　1767　従五位下　大和守
　1783　若年寄
　1784　佐野政言（さのまさつね）により斬り付けられ、４月２日未明、死去
佐野政言　　1757-1784

　私、酒井雁高は先日のテレビを見ました。これは、インターネットから、紹介
(Wikipedia)
天明４年（1784 年）３月 24 日正午頃、江戸城内の若年寄部屋から退出し、中之間に入ろうとしていたところ、桔梗の間に控えていた新番士の佐野政言に「御覚有るべし」と声をかけられて斬りつけられた[注 1]。意知は初太刀で肩先を三寸ほど、深さは七分ほど斬られた[2]。意知はよろけながらも桔梗の間に向けて逃走したが、佐野はそれを追い詰め、大廊下で転倒したところをその腹部めがけて突き刺そうとして、股を骨に達するほど深く刺した。意知はなおも逃れ、大廊下の新番所側にある暗がりに倒れ込んだ[2]。佐野が意知を見失ったところ、大目付の松平対馬守忠郷が走り出て取り押さえ、柳生久通によって脇差を取り上げられた[3][4]。意知は抜刀しなかったが、指が一本落ちるほどに切りつけられていた[5]。

意知は重傷であったが存命であり、直ちに駕籠に乗せられて神田橋の意次邸に運ばれた[5]。しかし、肩と股の傷は骨にまで達する深さで、治療のしようがなく、この傷がもとで４月２日未明に死去した[6]。享年 36。戒名は仁良院殿光嶽元忠大居士、墓所は勝林寺[5]。

この暗殺に対して世間は佐野を賞賛し、意知に対しては冷たかった。意知の葬儀は没した日の夕方に行われたが、前日に付近で火事があったために町火消の人足が多く集まっており、石や馬沓を投げたり悪口を浴びせるものもいたとされる[7]。また同じ頃に行われた松平右近将監の葬儀を意知のものと勘違いして石を投げるものもいたとされる[7]。さらに「斬られた馬鹿年寄と聞くとはや、山もお城もさわぐ新番（「馬鹿年寄」「山もお城」は山城守であった若年寄の意知、新番は佐野が新番士であったことにかけている）」[6][8]、「山城の城の御小袖血に染ミて赤年寄と人はいふなる」といった落書や、「おらは田沼を憎むじやないが、ザンザ 独息子も殺された、オヨ佐野シンザ 血ばザンザ よい氣味じやエー」という戯れ歌（さんさ節）も広まった[8]。

父子ともに現役の幕閣であったため、意次と別居するために田沼家中屋敷または下屋敷へ移ったが、新たな屋敷を構えたのは暗殺の直前であった。江戸市民の間では、佐野を賞賛して田沼政治

に対する批判が高まり、幕閣においても松平定信ら反田沼派が台頭することとなった。江戸に意知を嘲笑う落首が溢れている中、オランダ商館長イサーク・ティチングは「鉢植えて 梅か桜か咲く花を 誰れたきつけて 佐野に斬らせた」という謡曲『鉢木』に因んだ落首を世界に伝え[9]、「田沼意知の暗殺は幕府内の勢力争いから始まったものであり、井の中の蛙ぞろいの幕府首脳の中、田沼意知ただ一人が日本の将来を考えていた。彼の死により、近い将来起こるはずであった開国の道は、今や完全に閉ざされたのである」と書き残した[10]。

意知の死後、意次の権勢は急速に翳りを見せるようになり、意次にも大きな打撃を与えた[11]。この事件から２年半後に意次は失脚して隠居し、意次の跡は、意知の長男・意明（当時の名乗りは幼名の龍助）が継いだ。しかし、後見した意次が間もなく没し、意明も夭折した。その跡を継いだ次男・意壱、四男・意信のいずれも早世し、意知の血筋は絶えた。田沼家の家督はその後、意知の従子にあたる意定、次いで意知の弟・意正が継いだ。
蔦屋重三郎が影響を受けた武家、町人、文化人

木網　1724　元木網　もとの　もくあみ　狂歌
春信　1725　鈴木春信　はるのぶ
東作　1726　平秩東作　へづつ　とうさく　狂歌
源内　1728　平賀源内　ひらが　げんない
清經　1730s　鳥居清經　きよつね
清廣　1730s　鳥居清廣　きよひろ
三陀羅法師　1731　三陀羅法師　さんだらぼうし　狂歌
龍水　1731　勝間龍水　りゅうすい　俳諧絵本　山の幸　海の幸
應挙　1733　圓山應挙　まるやま　おうきょ　圓山派　京都の絵師
裏住　1734　大屋裏住　おおや　うらずみ
素外　1734　谷素外　たに　そがい　大坂出身、談林俳諧　実ハ写楽（酒井藤吉・説）
喜三二　1735　手柄岡持（おかもち）　狂歌
豊春　1735　歌川豊春　とよはる
清満　1735　清満　きよみつ　紅摺絵
兼葭堂　1736　木村兼葭堂　きむら　けんかどう　大坂の学者、収集家
菅江　1738　朱楽菅江　あけら　かんこう　狂歌
重政　1739　しげまさ　＊青楼美人合姿鏡　＊春章と分担　＊版元・須原屋　素外の弟子
團十郎５　1741　團十郎　だんじゅうろう　歌舞伎　梨園
橘洲　1743　唐衣橘洲　きっしゅう　狂歌
焉馬　1743　烏亭焉馬　うてい　えんば　歌舞伎の後援　大工の棟梁　團十郎と義兄弟
春章　1743　勝川春章　しゅんしょう　＊生年が判明し、若い
春好　1743　勝川春好　しゅんこう
春町　1744　恋川春町　はるまち　戯作者
参和　1744　唐来参和　さんな　戯作者
保己一　1746　塙保己一　はなわ　ほきいち　全盲の学者　群書類集を完成
江漢　1747　司馬江漢　こうかん
田善　1748　亜欧堂田善　でんぜん　銅版画
赤良　1749　四方赤良　よもの　あから　＊大田南畝（なんぽ）　蜀山人　幕府の銅座

楚満人　　1749　南仙笑楚満人　なんせんしょう　そまひと　戯作者
全交　　1750　芝　全交　しば　ぜんこう　戯作者
唐丸　　1750　蔦唐丸　つたの　からまる　蔦屋重三郎　版元　絵入狂歌本　天明、寛政
金埒　　1751　馬場金埒　ばば　きんらつ　狂歌師
飯盛　　1753　宿屋飯盛　やどや　めしもり　狂歌師　*国学者・雅望（まさもち）
真顔　　1753　鹿都部真顔　しかつべ　まがお　狂歌師
歌麿　　1757*　喜多川歌麿　うたまろ　　*遊び仲間・俊満と同年か
北齋　　1760　北齋　ほくさゐ
政演　　1761　北尾政演　まさのぶ　浮世絵師　花藍からん　俳諧名　素外の弟子

◯車 浮世（くるま　うきよ）・女史　　べらぼう　蔦屋栄華乃夢噺
　*梶田まり子さんより雑誌資料を頂戴
父・丸山重助　母・津与
柯理（からまる）　*この名前を付けた両親も、かなりの知識人
　*狂名は蔦唐丸（つたの からまる）
1750（寛延 3）重三郎、吉原に生まれる
1756（寶暦 6）7 歳の時　吉原引き手茶屋・蔦屋の喜多川氏の養子となる
1760s　鱗形屋孫兵衛・鶴鱗堂　吉原細見　しかし改定せずに評判を落とす

1772（安永 1）吉原大門五十間道に、耕書堂を開く
1773（安永 2）24 歳　蔦屋重三郎・耕書堂
　*重政（画）／一目千本　挿花画集　改版（妓楼、遊女名を削除）・手ごとの清水
1774（安永 3）細見・嗚呼（ああ）御江戸　序文・福内鬼外（*源内）　*男色家
1775（安永 4）蔦屋が吉原細見を刊行・販売
1775（安永 4）春町／金〻先生栄華夢　鱗形屋　黄表紙
1776（安永 5）喜三二、政演、赤良（南畝）

1781（天明 1）歌麿（画）燕十（作）／身貌（みなり）大通神略縁起
1782（天明 2*）政演画／自筆鏡　吉原傾城・新美人合自筆鏡［表紙］
　*奉書見開きの豪華自筆鏡、全 17 人の傾城の自筆集　この前後にも無い
　*青楼名君自筆集［外題また内題］　天明四年［序文］
　*四方山人［序文］　朱楽菅江主人［跋文］
1783（天明 3）吉原細見、独占販売　日本橋通油町に本店
1787（天明 7）松平定信が寛政改革
　*世の中に蚊ほど　うるさきものはなし　ぶんぶぶんぶと夜も寝られず
1787（天明 7）画本虫撰（むしえらみ）［鳥獣魚介］*歌まくら、抱き合せ
1789c 潮干のつと（しおひの　つと）　［鳥獣魚介］
1789（寛政 1）歌麿／狂月望（5 図）*月　一帖　諸歌狂詠　歌麿
　*月雪花の順序で刊行された
1790c 百千鳥狂歌合（ももちどり　きょうかあわせ）［鳥獣魚介］

1790（寛政 2）歌麿／銀世界（5 図）* 雪　半紙一冊　　諸歌狂詠　歌麿
1790（寛政 2）歌麿／普賢象（5 図）* 花　　半紙一冊　　歌麿画
　* ふげんぞう、櫻の品種の名前
1791（寛政 3）洒落本が発禁処分　* 手鎖（てじょう）　両手首が鉄の輪で嵌められる　横状 8
　* 山東京傳が手鎖（てじょう）50 日　蔦屋は身上半減（年間所得の半分を没収）
　* 歌麿／美人画（大首絵、おおくびえ）を刊行
1792（寛政 4）母・津与　死去
1794（寛政 6）写楽の役者絵（大首、28 枚）が刊行
　*10 ヶ月間で 130 余枚
1795（寛政 7）歌麿の美人、紅雲母（きら）
　* 歌麿は写楽の雲母摺役者絵を美人画に応用
1797（寛政 9）脚気にて、48 歳歿
　（雁註）脚気で死ぬというのは、意外である。脚気はビタミン C 不足が原因。